

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 25 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530997

研究課題名（和文） 日本・韓国・ブラジルを結ぶ移民学習教材の開発とカリキュラム・モデルの構築

研究課題名（英文） Curriculum design and materials development for learning about migration among countries including Japan, Korea, and Brazil

研究代表者

服部 圭子 (HATTORI KEIKO)

近畿大学・生物理工学部・准教授

研究者番号：30446009

研究成果の概要（和文）：本研究は「移民」および「人の移動」をテーマとした多文化共生に向けた包括的なカリキュラム・モデルの構築と、小・中・高・大学・地域・博物館などの活動現場で利用可能な教材開発を目的とした。移民教材開発の視点やキーコンセプトを提示し、日本と韓国に共通するブラジル移民の歴史調査や滞日外国人へのインタビューをもとに「読み物資料」を開発した。一方で、国内外の日系ブラジル人の子どもたちを対象とした「移民カルタ」を開発し、日本・韓国・ブラジル他の学校教育や地域活動の現場での実践を試みた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to develop a curriculum model of comprehensive multicultural education under the theme of ‘international migration’ as well as to make teaching materials useful for school setting from elementary schools to universities and for museums. First, classifications of teaching materials are reviewed. Second, key concepts for migration study are extracted. Third, actual materials, ‘reading materials’ and ‘KARUTA’, are developed. Based on the fact that both Korean and Japanese migrated to Brazil in their history, the research was conducted by interviewing a Japanese-Brazilian and a Korean-Brazilian to begin with. Then, non-Japanese people living in Japan were also interviewed, who contributed to develop reading materials. In addition, ‘KARUTA’ was created for children with Brazilian background both in Japan and Brazil. Lastly, both of these materials were used at high schools, universities, and at the educational settings in the society in Korea, Japan and Brazil.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：教育学、文化人類学、言語学

キーワード：国際情報交換、移民：人の移動、多文化共生、カリキュラム開発、滞日外国人、韓国：ブラジル：中国、国際理解教育、教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

研究の背景の1つとして、近年、日本では加速的なグローバル化が進む中、「多文化共生」が国家的・地域的課題となっていることが挙げられる。法務省の発表によると、我が国の外国人登録者数は10年前の1.4倍となり、平成21年度末現在218万人を越え総人口の1.71%に達している。研究代表者も全国的に展開している「地域日本語活動」と呼ばれる滞日外国人と日本人ボランティアの教室のコーディネータおよびボランティア養成講座の講師として関わってきた。しかし、参加者の主な関心は日本語を「教える」ことや自己実現の側面に置かれがちであり（服部2006ab）、ステレオタイプの認識や事実認識不足に対応する対策が必要である。日本人と外国人の対等な関係性を育み、外国人も自己実現を行うことができる社会の実現に向けて、教育の観点からの研究課題の解決が望まれる。つまり、多文化化・多言語社会を生きるマジョリティ側の日本人の「共生」に向けての態度の養成を、学校教育および生涯教育において実施することが必要であると考へ始めていた。

もう1つの重要な背景は、日本と韓国の間にも共通の移民の歴史があるということである。研究分担者らは、これまでに移民をテーマとした研究に深く携わってきたが、日本からハワイや合衆国、南米に移民した歴史をたどると、それは韓国から移民した人々の歴史と重なった。ちょうど2008年は日本人ブラジル移民100周年の年に当たったが、その歴史の中で、日系人は今日150万人にまで増加し、ブラジルの多文化社会を構成する重要な構成員となっている。一方、韓国からも日本に遅れること50年の1960年代からブラジルへの本格的移民が開始された。日韓双方にとって日韓以外の国への移民史を並行してながめることにより、共通の歴史があることに気づき、差異にも注目できる。そこで、日本、アメリカ、ブラジル、韓国と複数国間の視点で移民を眺めることにより、グローバル化した社会に対応した、「共生」に向けての資質や態度を養うための具体的な教材開発が可能となると考へた。

また、研究代表者は日系ブラジル人を対象とした学校、地域、職場、教会の4領域における実態調査に関わった経験から、日本の多文化化を構成するニューカマーの中心的存在として捉えられている日系ブラジル人の子どもたちの日本語学習・母語維持やアイデンティティの問題も重要な課題だと認識していた。国際教室や国際理解の授業において、日本に移民してきた人々のさまざまな課題を日系人の歴史的経験に重ねて学ぶための具体的な教育内容を織り込み、さらにはブラ

ジルで生活する日系の子どもたちにも利用可能な教材開発が重要であると考えたのである。

多文化共生社会における理論的・実証的研究は多いが、その多くが欧米の国々を対象としており、韓国やブラジルは扱っていない。また地域で活動する日本語ボランティア養成講座で日系移民の歴史や背景を組み込んだものはほとんどない。このような背景のもと、さまざまな学校教育や地域活動、ブラジルの日系人社会で利用できる教材開発に着手することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、多文化化が進む日本社会における様々な接触場面の現場における「移民」をテーマとした包括的なカリキュラム・モデルの構築と、小学校・中学校・大学・地域・移民系博物館の各々の教育・活動現場を対象とした具体的な教材開発を目的とした。具体的には、次の4点を明らかにする。

### (1) 調査；資料収集とインタビュー調査

内外の日系移民、多文化教育に関する文献や展示物を通して、理論的背景の確認、移民の歴史の調査、移民学習教材の整理をする。

(2) 多文化教育のためのカリキュラム開発；学校・地域における移民に焦点を当てた授業のためのカリキュラム構築、背景知識としてのコンセプト、「国際理解単元構想」を確立する。

(3) 教材開発；学校・地域における移民に焦点を当てた具体的な授業や教材（リソース）開発を行う。

(4) 実践；(2)で作成したコンセプトをもとに開発した(3)の教材を利用して、各領域で利用可能な実用例をまとめ、実施する。

(5) 公表；具体的な教材の製品化、報告書の作成などで公表する

## 3. 研究の方法

(1)については、韓国・日本を中心に、まず、内外の文献調査研究によって行う。そして、移民に関する資料収集と、博物館や移住資料館を訪問して展示表象分析を実施する。さらに、ブラジルの日系移民に関する写真などの情報収集も行う。一方で、日系ブラジル人や韓国他の国々からの留学生を含む滞日外国人を対象にインタビューを実施する。

インタビューは、Flick(1995)が紹介するナラティブの手法を援用し、桜井(2002)を参考に半構造的インタビューの形式で、平均各約30分実施した。インタビューの際には研究目的であることを伝え、教材開発への承諾を得た。インタビューは文字化し、必要に応じて韓国語と中国語に翻訳を行って、データベース化する。

(2)については、日本国際理解教育学会の日韓共同教材開発プロジェクトで「人の移動」チームに参加した研究者らとともに、移民をテーマとした教材開発のためのキーコンセプトを抽出する。

(3)については(1)で行ったインタビューや(2)をもとに、学校教育における国際理解教育や総合的な学習および地域活動において利用可能な「読み物資料」を作成する。また、日系ブラジル人の子どものアイデンティティ確立や母語維持を意識した「カルタ教材」を開発する。

(4)については、研究協力者らとも議論を重ね、「移民」や「人の移動」学習のための授業構想を練り、国内外の小・中学校・高等学校・大学に加え、地域在住の外国人を対象としたことばの学習の現場での実践を行う。

(5)は、実際のカルタ作成や報告書の作成によって、公表する。

#### 4. 研究成果

(1) これまでに蓄積された日本からブラジルへの移民との相違点の比較を念頭に、日本と韓国の移民に関する文献収集を行った。その上で、博物館や資料館を訪問した。具体的には、韓国仁川海外移民博物館、JICA 横浜海外移住資料館、神戸海外移住と文化の交流センターを訪問して展示表象分析を行うとともに、関係者に移民の歴史や教材作成、博学連携に関するヒヤリングを行い、今後の研究に役立つ資料を得た。移民研究の専門家の講義も受けた。さらに、ブラジルの日系移民に関する文献収集に加え、日系1世の写真などの情報収集を実施し成果を得た。

Mukai& Bulnette(1990) が挙げた10の移民の類型の中のUターン移民現象が日本と韓国で起こっている。そこで、Uターン移民として、ブラジル人が集住する群馬県太田市にて「バイリンガル教師」として教育に携わるサンドラ・スエナガさん(研究協力者)と、日本在住韓国系ブラジル人のカタリーナ・ホンさんにインタビューをした。太田市で小学校の国際授業やサタデースクールの参観も行い、小学校長やバイリンガル教員へのインタビューを実施し、日系人の教育・社会活動・アイデンティティの課題などを生の声を通して確認した。さらに、関西地域を中心に、多文化化社会を構成する在日の外国人に加え、海外の多文化教育専門家の協力も得て、韓国や中国でもインタビューを行った。

(2)次に、A. Banks の「概念的 multicultural キュラム論」をもとに、多文化共生のためのキュラム構築を行った。「移民」現象を背景とした変動する社会の中で生きるために必要な市民的「価値」として「人権」「公正」「多様性」「共生」の4つの視点を設定し、【図1】に示したように、「移民」をキー

ワードにしてそれらの価値(視点)を獲得させるためのキーコンセプト(具体的学習内容)を示した。この視点をもとに、大単元の構成を作成した。

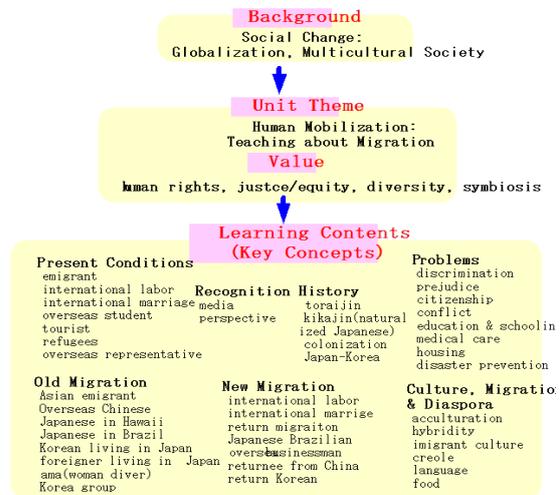


図1 「移民」教材の開発のための視点とキーコンセプト

(3)この大単元構想に沿って、多文化化する社会の一員として、移民学習を通して、人権、公正、多様性、共生の資質や態度を養うことを念頭に、「読み物資料」を作成した。作成にあたっては、(1)で実施したインタビューを文字化して利用した。さらに、日系ブラジル人児童を対象とした移民学習カルタの開発を行った。日本とブラジル両国に関連した「移住者の思い」「努力・貢献」「多文化共生・友好関係」「生活・文化」「教育」「知識・事実」「アイデンティティ」「文化変容」「苦労」の要素を念頭に、(1)の調査で得た知見をもとに、読み札の頭に置く句や移民学習に関連する用語を作成・抽出した。研究協力者のサンドラ・スエナガ・テルミの全面的な協力を得て、実際の写真を用いることができたため、より具体的な個人のヒストリーを背景に独創的で深みのあるものとなった。また後の著作権処理も軽減できた。「カルタ」のもう一つの意図は、日系ブラジル人の子どもたちへの言語支援である。ひらがなの読み札は日本語初級学習を対象としたが、裏書の歴史や背景に関する説明は、漢字仮名交じり文で書くことで、日本語中上級者の学習に繋がることを考えた。同様の内容がポルトガル語でも記されており、子どもたちの母語維持のためのツールを提供できるものとなった。(4)開発教材をもとに、日本の高校での「人の移動・移民」「留学生」をテーマとした国際理解の授業、韓国の高校での「移民」授業、中国の中学校での「留学生」に関する授業、大学や地域日本語活動における「移民」や「留学生」をテーマとした授業や活動を実施した。

「読み物資料」を通じた出会いにより学生の学びが促進されたことは感想文などで確認されたが、発話時の表情や声のトーンを紹介することは今後の課題となった。

(5)「読み物資料」と「移民カルタ」の作成に加えて、それらのコンセプトや意義、および実践内容報告を収録した冊子を発行した。また、3年間の研究の経緯は、その都度日本と韓国の学会において報告を行った。

今回は教材開発に焦点を当てたため、実践は国内外の各種教育機関で実施したものの、限られた領域となった。今後は、博物館との連携や教員研修にも役立てていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

①服部圭子、地域日本語教育からみる国際理解教育の課題—生活のためのことばの視点から(特集 ことばと国際理解教育)、国際理解教育、査読有、16巻、2010、74-82

②森茂岳雄、多文化共生をめざすカリキュラムの開発と実践—学会・学校・教師の取り組み—、査読有、30巻、2009、25-41

③森茂岳雄、多文化教育のカリキュラム開発と文化人類学—学校における多文化共生の実践に向けて—、査読有、2009、96-115

〔学会発表〕(計10件)

① Han Geon-Soo, Hattori Keiko 他、The Mutual Understanding of East Asian EIU through the development of co-textbook、韓国国際理解教育学会、2011年11月12日、ソウル大学(大韓民国)

② 中山京子、服部圭子、福山文子、日系ブラジル人をテーマとしたカルタ教材の開発—移民学習と日本語学習をつなぐ—、日本国際理解教育学会、2011年6月18日、京都橘大学(京都)

③ 服部圭子、Han Geon-Soo、森茂岳雄、中山京子、「人の移動」(留学生)をテーマにした日中韓三か国教材開発—インタビューおよび読み物教材を用いて—、日本国際理解教育学会、2010年7月4日、聖心女子大学(東京)

④ Nakayama Kyoko、Morimo Takeo、Hattori Keiko、Otsu Kazuko、Japan-Korea Cooperative Material Development Project on 'Humana Mobilization': Its Idea and Practice、韓国国際理解教育学会、2009年11月13日、梨花女子大学

⑤ 服部圭子、地域日本語ボランティアの不安と気づき—養成講座の充実に向けて—、日本国際理解教育学会、2009年6月13日、同志社女子大学(京都)

〔図書〕(計8件)

① 森住衛、井村誠、神谷健一、服部圭子、柿原武史、仲潔、他、関西言語文化教育研究会研究論集編委員会編、金星堂、言語文化教育実践—言語文化観をいかに育むか—、2011、239-261

② 中山京子、日本移民学会編、御茶の水書房、移民研究と多文化共生、2011、340

③ 森茂岳雄、他、勁草書房、「多文化共生」は可能か—教育における挑戦—、2011、22-42、177-216

④ 森茂岳雄、中山京子、明石書店、日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—、2010、450

⑤ 森茂岳雄、中山京子、他、明石書店、学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—、2009、292

〔その他〕(計4件)

① 大船ちさと、スエナガ・サンドラ・テルミ、中山京子、服部圭子、福山文子、森茂岳雄、(監) 中牧弘允、(有) アークインクス、日本・ブラジル「移民カルタ」、2012

② 服部圭子、中山京子、森茂岳雄他、日本・韓国・ブラジルを結ぶ移民学習教材の開発とカリキュラム・モデルの構築、2012

③ 服部圭子、「留学生」をテーマとした日中共通教材の作成と実践、日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発、2012、156-169

④ 中山京子、「人の移動」をテーマとした教材開発、日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発、2012、110-155

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

服部 圭子 (HATTORI KEIKO)

近畿大学・生物理工学部・准教授

研究者番号：30446009

### (2) 研究分担者

森茂 岳雄 (MORIMO TKEO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：30201817

(H23：連携研究者)

中山 京子 (NAKAYAMA KYOKO)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号：50411103

(H23：連携研究者)

### (3) 連携研究者 なし